

第6章

「グローバル民俗学」の構想

——柳田國男の「世界民俗学」の今日的展開として¹⁾

上杉 富之

はじめに

筆者は文化・社会人類学を専門とするが、現在の研究テーマやトピックの関係から（生殖補助医療をめぐる親子・家族・結婚の問題や日本と韓国の海女さんをユネスコの世界遺産に登録する運動をめぐるグローバル化とローカル化の問題など）、そしてまた筆者が置かれている現在の研究環境から（日本の民俗学のメッカの一つ成城大学に奉職していることなど）、民俗学にも大いなる関心を持つものである。こうした筆者の立ち位置から近年の日本内外の民俗学ないし人類学の研究動向を見ていると、両者がともに研究対象や研究方法について同じような課題に直面しており（研究テーマやトピックの過度の専門化や細分化とそれに伴う大学・研究機関への就職難など）、それを克服するためには新たなビジョンを持つ必要に迫られているように思われる。

実際、欧米の学界では、今日の社会的、文化的な研究環境の変化に合わせて民俗学や人類学を含めたさまざまな学問分野で理論と方法の再構築や研究テーマ・トピックの再選択が行われている。例えば、かつて1950年代に袂を分かったイギリスの民俗学会（The Folklore Society）と王立人類学会（The Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland）は両学会・分野の再構築ないし「再接近」を念頭に置いて、2015年の10月、両者の間の対話を再開するシンポジウムを開催した（イギリス民俗学会のHPによると、今後、毎年秋に同様のシンポジウムを開催する予定であるという²⁾）。また、人類学では、過度の専門化や細分化を懸念ないし批判する論調が徐々にではあるが高まりつつある（Fioramonti 2013, Parkin and Ulijaszek (eds.) 2011 参照）。

そこで、本小論では、以下、民俗学を中心に、①民俗学の再編ないし再構築が迫られている今日の社会的・文化的な背景を確認し、②それに対する日本内外の民俗学のこれまでの対応の

あり方を検討する。その上で、③筆者が有力と考える対応のあり方を、「グローバル民俗学」の構想として提示する。そして、④「グローバル民俗学」は柳田國男がかつて構想していた「世界民俗学」の今日的な展開であろうことを明らかにする。また、⑤「グローバル民俗学」は、グローバル化という新たな観点を導入して従来の民俗学を精緻化するものに他ならず、従って、⑦民俗学の今日的な課題は単なる「脱土着化」ではなく、むしろ、装い（理論と方法）を新たにした「再土着化」であると結論付ける。

1. 民俗学の置かれた現状とそれへの対応

(1) グローバル化

日本内外の民俗学が置かれている今日の社会的、文化的状況をもっとも象徴的に表わす言葉はグローバル化であろう。グローバル化とは、ごく簡単には「人やモノ、情報、カネなどが国境を越えて大規模かつ迅速に移動し、地球全体があたかも一つのシステムとなるような現象ないし過程」と言うことができよう。1960年代以降の急激なグローバル化の結果、今や、いかに辺鄙な場所の民俗事象であっても多かれ少なかれグローバル化の影響を受けているということについて異論をはさむ余地はあるまい。グローバル化に焦点を当てるかどうかは別として、今日、民俗学を学び、研究するうえでまずもって知っておくべきことは政治や経済、社会や文化などをめぐるあらゆる民俗事象がグローバル化の影響を受けているという厳然たる事実である。

(2) グローバル化と国際化

ところで、いわゆるグローバル化をめぐるさまざまな問題を検討する場合には関連した2つの言葉ないし概念と、それらを使用する際の立場ないし観点を明確に区別しておく必要がある。すなわち「国際化」と「グローバル化」の2つの言葉・概念の区別と、それらへの対応の区別である。

国際化（internationalization）は明確な境界を持った国家（nation state）の存在を前提としており、そうした複数の国が政治や経済、社会、文化等のさまざまな分野で相互に協力したり影響を及ぼし合ったりする現象に注目し、強調する言葉である。従って、国際化という言葉はあくまでも国ごとの独立性や独自性を前提としつつ、国と国の間の相互関係や相互依存に注目し、しばしばそれを強調することになる。

例えば、日本の民俗学会等で国際化が唱えられる場合には、国際化は、独自の社会や文化を

持つものとしての日本を前提とし、そうした日本がいかにして国際社会（海外の国々、特に欧米社会）と関係を持ち、相互理解を達成すべきかなどという問題として意識される。その結果、国際化への対応として、しばしば外国語（特に英語）を用いた国際シンポジウムやワークショップの開催が企画される。また、国際化の一環として、個々の研究者が海外の（特に欧米の）学会で英語を用いて日本の事例研究を発表したり、国際的な学会誌に英語論文を投稿することなどが期待される。その際、日本の研究者は、日本の民俗事象を日本に固有なものとして紹介する傾向にある。要するに、日本の学会にとっての国際化は往々にして日本の研究事例を日本の文脈の中で記述、分析し、それを英語で欧米の学界に向けて発信することを意味する。また、そうしたことを通して、日本と欧米の民俗学を比較対照し、日本の民俗学を欧米民俗学の水準に到達させることが国際化とされていると言ってよいだろう。

一方、グローバル化（globalization）は国の境界（国境）を超えた地球規模の（global）社会や文化の存在を想定しており、その中で人やモノ、情報、カネ等が大規模かつ迅速に移動して共通の生活様式や価値観が生み出される現象や過程に注目し、強調する言葉である。従って、グローバル化という言葉は、国ごとの独自性や独立性を無視するわけではないが、それよりもむしろ国境を越えた地球規模の社会や文化の拡大や浸透、再編等に関心を向け、強調することになる。

例えば、日本の人類学や社会学でグローバル化が議論される場合には、グローカル化は、日本が独自の社会や文化を持つかどうかは当面問わず、アジアの東端というローカルな場に位置する国・日本でいかに欧米中心のグローバル化の波を受け入れ、それに適応しているのかなどという問題として意識される。あるいはまた、日本をアジアにおけるグローバル化の中心のひとつと考え、日本発のグローバル化がいかにアジア諸国のローカルな社会や文化を再編しているのかというような問題としても意識される³⁾。その結果、グローバル化への対応として、国際化への対応と同様に、しばしば外国語（特に英語）を用いた国際シンポジウムやワークショップの開催が企画される。しかしながら、そうした場では、国内の特定の問題であろうとも、それは地球規模（グローバル）で同時並行的に進行する現象として議論される。また、個々の研究者が海外の（特に欧米の）学会で英語を用いて日本の事例研究を発表したり国際的な学会誌に英語論文を投稿したりする場合も、日本の事例ではあっても地球全体が（グローバルに）直面する問題に連なるものとして紹介する傾向にある。要するに、日本の学会にとってのグローバル化は日本の研究事例を世界的（グローバル）な観点から記述、分析し、それを主として英語を通してではあるが、欧米を中心とした世界各国の学界に向けて発信することを意味する。また、そうしたことを通して、日本と欧米の人類学や社会学を比較対照し、場合に

よっては欧米の人類学や社会学に対して異議申し立てをすることも目論まれている。

以上、国際化とグローバル化の概念的な区別と、両者の区別に基づく日本の民俗学の対応ないし対処の違いを簡単に述べた。近年、日本の民俗学会でしきりに国際化が叫ばれているが、上に述べたような意味での国際化とグローバル化の区別、従ってまた、そうした区別に基づく対応や対処の違いが明確に意識されているとはいいがたい。

(3) グローバル化への対応

いま問題とすべきは（対応すべきは）民俗学の国際化というよりもむしろ民俗学のグローバル化（グローカル化）であるとの観点から、欧米及び日本の民俗学や人類学の研究動向を若干紹介してみよう。

冒頭（「はじめに」）で述べたように、イギリスでは、グローバル化への対応の一環として、民俗学と人類学の対話の回復が試みられている。その目指すところは、グローバル化時代の諸問題に適切に対応するため、一度は細分化された民俗学や人類学に再び「包括性」や「全体性」を取り戻すことにあると考える。一方、ドイツでは、民俗学は現代的な諸問題に積極的に取り組み始めており、場合によっては、いわゆる「カルチュラル・スタディーズ」と重なるようなトピックやテーマを扱うようになってきているという（ヒルシュフェルダー 2008 参照）。また、ドイツの民俗学や人類学は今や国ごとの調査研究ばかりではなく欧州全体（EU）を視野に入れたヨーロッパ人類学として展開されつつあり、興味・関心も欧州の再編・再統合にとまなう人びとの共同性やつながりの構築のようなより今日的なものに移ってきているという（森（編）2014 参照）。

これに対して、アメリカの民俗学は近年、「公共民俗学」（public folklore）という新たな名称を付した研究分野の出現と急速な拡大からもわかるように、人びとの日々の生活に密着したより実践的な問題を扱うようになってきている。市民参加型の街づくりや災害からの復旧などが主要なテーマ・トピックとなっており、民俗学は再び実践性を取り戻しつつあるという（菅 2014：167-191 参照⁴⁾）。

欧米の民俗学の近年の研究動向からは以下のような共通点が見て取れよう。

一つには、近年の研究環境の変化に対応し、民俗学の理論と方法を再編ないし再構築する志向が見られるということである。二つ目として、欧米の民俗学の再編ないし再構築は必ずしも国際化を志向していないということである。そして、三つ目として、そうした民俗学の再編や再構築は近年の地球規模の政治や経済、社会、文化等の大きな変化ないし変動、すなわちグローバル化に対応しているということである。

欧米の民俗学が必ずしも国際化を志向していないという点については若干の説明が必要であろう。民俗学の国際化は、日本の場合について述べたように、ある国の民俗学ないし民俗学者が他国の民俗学や民俗学者と交流を持ち、それを通して、当該国の民俗学を国際的な水準に高めようと試みることと見なせるであろう。この点で、欧米の民俗学や民俗学者が交流する場合には言語の障壁が比較的低いこともあり、英語を通しての交流という意味での国際化はすでにある程度達成されている。そのこともあって、欧米の民俗学でことさらに国際化が叫ばれることは少ない。欧米の民俗学はむしろ意識的に「国内化」（国内の問題に特化）している。

欧米では、人類学ないし民族学が本来的に国際化への志向を持っている。そのことを十分に認識している欧米の民俗学や民俗学者は意識的に人類学・人類学者と棲み分ける道を選び、自らの独自性を維持、強調するためにあえて特定の国や地域の民俗事象にこだわっているように思われる。

例えば、アメリカの場合、アメリカ人類学会（American Anthropological Association。アメリカ民族学会 American Ethnological Society も含まれる）とアメリカ民俗学会（American Folklore Society）が独立して存在し、それぞれの学会の最近の学会誌⁵⁾を通読してみると、扱うテーマやトピック等が一部重複しながらも、明らかに両者が棲み分けていることが分かる。アメリカの民俗学は明らかにアメリカ国内の問題を中心に取り上げている。しかしながら同時に、アメリカでは民俗学会誌に掲載された論文であっても、近年、アメリカ国内の特定の問題が地球規模の政治や経済、社会、文化の変化・変動と連動していることに言及する傾向があることに注意を喚起しておきたい⁶⁾。

以上のことから、筆者は、欧米の民俗学は今国際化よりもむしろグローバル化への対応を模索しているものと考えている。

一方、日本の民俗学はもっぱら国際化に関心が向いているように思われる。例えば、2015年7月12日に関西学院大学大阪梅田キャンパスで開催された第881回日本民俗学会談話会（第67回年会プレシンポジウム）「世界のなかの民俗学」における川森博司氏の発表のキーワードは「脱土着化」であったが、その意図は別として、具体的には、海外の国際学会に参加する等して日本の民俗学（者）に海外の民俗学（者）と対話を求めるものであった（川森2015参照）。民俗学の「脱土着化」は、結局のところ、民俗学の国際化を目指すものと言えよう。

実のところ、日本の民俗学は近年、首尾一貫して国際化を目指している。日本民俗学会は10年ほど前の2007年、第27期理事会（2007年10月～2010年9月）において海外との本格的な国際交流を進める方針を決定し、国際交流担当理事を置いた⁷⁾。以後、民俗学会の談話会

や年会で講演やシンポジウムを企画、開催し、国際化を進めていった。その一環として、例えば、2010年9月20日には、成城大学において、ドイツの著名な民俗学者、アルブレヒト・レーマン氏を招いた国際シンポジウムが開催された。また、2014年10月4日には、韓国の研究者を招いた国際シンポジウム、「“当たり前”を問う！」も開催されるなど、今日に至るまで、日本の民俗学を国際化する試みが継続されている。

以上、欧米と日本の民俗学の近年の研究動向を、近年の研究環境の変化、特にグローバル化と、それへの対応という観点から概観した。その結果、欧米の民俗学はグローバル化に向けた対応を志向し、日本の民俗学は国際化に向けた対応を志向していることがわかった。欧米は「民俗学のグローバル化」を志向し、日本は「民俗学の国際化」を志向していると言っても良いだろう。

すでに述べたとおり、筆者は、日本の民俗学にとって今もっとも重要なことは国際化というよりもグローバル化への対応だと思っている。確かに民俗学の国際化は重要であるが、民俗学に関心を持ち、実践する者すべてが海外の国際学会で、外国語を用いて、海外の研究者と交流をするという意味での国際化は必要もないし、現実的にそれは無理であろう。一方、民俗学に関心を持ち、実践する者は今日、あらゆる民俗事象の中にグローバル化の影響を見て取ることが可能だし、その必要がある。実際、欧米の民俗学がグローバル化への対応を進めているのはすでに述べた通りである。ただし、その場合には、以下で述べる通り、人びとの日々の生活実践という意味での民俗事象の調査研究を標榜する民俗学は単なるグローバル化ではなく、グローバル化とローカル化を同時に見ようとするグローカル化に焦点を当てるべきである。

2. グローカル研究

人類学を中心にしてではあるが、筆者はこれまで繰り返し、グローバル化に焦点を当てたグローバル研究には潜在的に限界があり、それを乗り越えるためにはグローバル化とローカル化の双方を射程に入れたグローカル研究 (glocal studies) を構想し、実施することが必要だと論じてきた (拙稿 2009a、2009b、2011、2012、2014、2015 参照)。詳細については拙稿を参照していただきたいが、その要点は以下の通りである。

グローバル化に伴うさまざまな現象の実証的かつ理論的な研究であるグローバル研究 (global studies ないし globalization studies) には、少なくとも以下の点で、潜在的だが根本的な欠陥がある。すなわち、①グローバル化の「中心」(起点)としての欧米諸国から「周縁」(到達点)としての非欧米諸国 (ローカルな場) への一方的な影響を強調する傾向にあり

(「力」の非対称性)、②往々にしてローカルの視点を欠き、その結果、社会や文化についてみると、③「中心」と「周縁」の間の同時性や相互作用性を見過ごし(「眼差し」の非対称性)、従ってまた、④雑種化やイノベーションなどによる社会や文化の再構築や多様化などという変動の実態も十分に評価することができない。要するに、グローバル研究は潜在的にグローバル化の中心と周縁の間の「力」の非対称性と「眼差し」の非対称性に基づいた研究であり、グローバル化現象ないし過程全般を研究対象としようとするものの、研究枠組みグローバル化そのものについても必ずしもの確に記述、分析するものではないということである。

加えて、非欧米社会を中心としたローカル(地方や地域)の人の視点を重視し、強調する民俗学や人類学等の研究者が行き過ぎたグローバル化に反対するあまり(反グローバリズム anti-globalism)、グローバル研究そのものを忌避する傾向にあったことも大きな問題であった。

筆者の立場は、グローバル研究の理論と方法には確かに是正すべき点があるものの、グローバル化の進行や浸透は厳然たる事実であって無視できるものではなく、従って、民俗学や人類学も積極的にそれに取り組むべきだというものである。ただし、民俗学や人類学がグローバル化に取り組むに当たっては、グローバル化に加え、グローバル化の結果引き起こされるローカル化にも焦点を当てるべきだと考える。また、ローカル化したモノや考え方の再グローバル化(re-globalization)や逆グローバル化(reverse globalization)、あるいは他の形のグローバル化(alter-globalization)を生じさせる事実も射程に入れるべきだと考える。

こうした観点から、筆者は、グローバル化とローカル化をともに視野に入れ、また両者が同時かつ相互に影響を及ぼすという事実を明示するために、社会学や人類学で1990年代初頭以降に使用されるようになったグローカル化の概念(glocalization)に注目し、以下のように再定義した。

グローカリゼーション(glocalization)とは、グローバリゼーション(globalization)とローカリゼーション(localization)が同時に、しかも相互に影響を及ぼしながら進行する現象ないし過程である。(拙稿 2011a:10)

また、再定義したグローカル化をキーワードとして、グローバル化とローカル化をめぐる社会的、文化的現象や過程に実証的かつ理論的に取り組むものとしての新たな研究を「グローカル研究」(glocal studies)と名付け、以下のように定義した

①定義

グローバリゼーションとローカリゼーションが同時に、しかも相互に影響を及ぼしつつ進行する過程ないし現象をグローカリゼーションと定義し、グローカリゼーションの実態や効果・影響を実証的かつ理論的に明らかにする研究を「グローバル研究」と呼ぶ。

②目的

グローバル研究を通して、今まで見過ごされてきた今日的な問題や課題をローカル（地域や地方）な視点から「対象化」(objectify)するとともに、著しく均衡の崩れた「中心」(欧米社会)と「周縁」(非欧米社会)の間の関係をローカルな立場から「対称化」(symmetrize)することを目指す。

③意義

グローバリゼーションとローカリゼーションが同時に、しかも相互に影響を及ぼしながら進行するグローカリゼーションの実態を明らかにし、ローカルな視点や立場を強調しつつ、より柔軟な社会と文化のあり方を提示する。(拙稿 2011a:11)

3. 「グローバル民俗学」

本小論の冒頭で述べたとおり、筆者は今日の民俗学が優先的に取り組むべきことは国際化と同時に、あるいはそれよりもむしろ、グローバル化だと考えている。また、グローバル化をより正当に記述、分析するためにはグローバル化そのものを研究するグローバル研究ではなく、ローカル化をも射程に入れたグローバル研究であるべきだと主張してきた。ここでは、さらにグローバル研究の理論と方法を民俗学に導入した新たな民俗学を「グローバル民俗学」(glocal folklore studies)として提唱する。

(1) 定義

グローバル研究の理論と方法を導入したグローバル民俗学を以下のように定義する。

グローバル化時代の現代にあつて、グローバル化とローカル化が同時に、しかも相互に影響を及ぼしながら進行するグローバル化こそが現代の日本の民俗事象を特徴づけると考え、グローバル化に伴う民俗事象の変動の実態を理論と実証の両面から明らかにする民俗学。

(2) 「グローバル民俗学」の試み—日韓共同の海女文化のユネスコ無形文化遺産登録運動の分析—

グローバル民俗学の試みの一例として、以下、筆者が行った日本と韓国が共同で海女文化をユネスコの無形文化遺産に登録しようとした運動（以下、「海女文化登録運動」と略述）の意味や意義に関する分析を示してみたい。なお、本事例の詳細な記述、分析については、拙稿（2011b、2014）を参照していただきたい。

① 海女文化登録運動の概要

韓国の済州島や日本の伊勢・志摩地方には、サザエやアワビ、ナマコ等の魚介類、ワカメやテングサ等の海藻などを素潜りで採ることを生業とする女性がおおり、海女という。海女は世界中で韓国と日本にしかいないことから、2000年代初頭から、当初は韓国が単独で、後には韓国と日本が共同で、海女の素潜り漁やそれにまつわる儀礼や信仰等を一括して「海女文化」として体系化し（調査研究資料を蓄積し）、ユネスコ（UNESCO：国際連合教育科学文化機関）の無形文化遺産に登録する運動を展開してきた。

② 海女文化登録運動の意味—グローバル、ローカル、グローカルの観点から—

日本と韓国が共同して進めた海女文化のユネスコ無形文化遺産への登録運動の意味ないし意義を、グローバル化とローカル化、そしてグローカル化という3つの異なった観点から検討してみたい。

グローバル化の観点から見ると、海女文化登録運動は、ユネスコの世界遺産保護、より正確には無形文化遺産保護の理念や文化政策が地球規模に拡大し、ローカルな場である韓国や日本に到達・浸透して共有されたことを意味する。韓国で最初に海女文化の登録運動が開始されたのは、2000年代初頭（2002年）であった。当時はまだ無形文化遺産保護条約が成立していなかったが、2002年のサッカー・ワールドカップ大会の記念行事の一環として海女をめぐる国際シンポジウムが開催され、その中で、条約の成立を見込んだ「海女文化」の体系的な「生産」の開始が宣言された。その後、若干の紆余曲折があったものの、2006年の無形文化遺産保護条約発効の年には、韓国は世界初の海女文化に特化した博物館（済州海女博物館）を開設し、そこを中心に海女文化を精力的に生産していった。2007年には韓国の関係者が日本の関係者に韓日共同による海女文化の無形文化遺産登録を呼びかけ、日本でも三重県鳥羽市の海の博物館を中心にして海女文化の生産が開始された。その後、韓国と日本の関係者はそれぞれ独立して、あるいは協力して精力的に海女文化を生産し、登録運動を推進していった（拙稿

2011b、2014 参照)。グローバル化の観点から見ると、韓国と日本における海女文化登録運動は、ユネスコの無形文化遺産保護の理念と政策がグローバル化して拡大、浸透し、それが到達したローカルな場で新たな文化が生産され、登録運動が開始、展開された典型的な事例ということができよう。

海女文化の登録運動は、グローバル化に拡大・浸透したユネスコの無形文化遺産保護の理念と政策が韓国と日本でそれぞれどのように受け入れられ、具体化されていったのかなどというローカル化の観点からも見ることができる。韓国の場合には、海女漁は神話や伝承、儀礼等と深く結びついていたことから、当初から、「海女文化」と呼ぶにふさわしい複雑な体系を持つものとして生産されていった。加えて、韓国では、海女の置かれた歴史的、社会的文脈に注目し、海女文化は女性の経済的自立や平等（海女の合議制）、平和（第二次世界大戦時に抗日運動を展開）、健康（長寿）を象徴するものとして体系化されていった⁸⁾。

一方、日本では、韓国ほどには海女漁に神話や儀礼が伴っておらず、従って、もっぱら素潜り漁としての海女漁が海女文化として強調されることになった。また、海女漁の方法や時期等が自発的に決められていること等に注目し、海女文化の中に海産資源を持続的に利用するという現代的な意味を読み取ることも試みられている⁹⁾。ローカル化の観点から見ると、グローバル化したユネスコの無形文化遺産保護の理念と政策に対応して同じように「海女文化」の生産を開始、展開したにもかかわらず、韓国と日本ではまったく異なったローカル化が進んでいったことがわかるであろう。

では、海女文化登録運動をグローバル化の観点、すなわちグローバル化とローカル化が同時かつ相互に影響を及ぼしながら進行するという観点からは、この運動にはどのような意味や意義が見出せるのであろうか。

まず第一に、グローバル化の観点を導入すると、同一ないし類似の社会、文化現象が異なった国・地域において同時多発的に生起していることをより明確に指摘できるであろう。すでに述べたように、日韓共同の海女文化登録運動はグローバルに拡大・浸透したユネスコの文化政策（無形文化遺産保護政策）が韓国と日本に到達したことでほぼ同時期に開始されたが（ユネスコの文化政策のグローバル化）、韓国と日本は共同で登録することを目指して連携しつつも、それぞれが別個に、独自の海女文化を生産していった（ユネスコの文化政策のローカル化）。海女文化登録運動については、韓国ないし日本いずれかの国に焦点を当てて記述・分析することも可能であり、その場合には、韓国と日本における海女文化の固有性や海女文化生産の独自性が強調されるであろう。これに対し、グローバル化の観点を導入すると、韓国と日本で同一の発端を持った同一の現象、すなわちユネスコの文化政策のグローバル化（グローバル化と

ローカル化)が同時併行的に進行していることがより明確に意識され、対象化されることになるであろう。

また、グローバル化とローカル化の相互作用に注目するグローバル化の観点を導入すると、これまであまり注目されてこなかった、ローカルの側がグローバルの側に与える影響に焦点を当てることができる。

日韓共同の海女文化登録運動についてみると、ローカルレベル(日本の伊勢・志摩・鳥羽地方と韓国の済州島)の海女文化登録運動が、グローバルレベル(ユネスコや文化遺産保護条約批准国)の文化と民族に関する原則ないし前提を根本的に問い直していることが指摘できるであろう。ユネスコないしユネスコに加盟する各国政府の文化に関する基本的な考え方は、1つの民族(国民)が1つの文化を持つというものである(「1民族(国民)1文化の原則」)。これに対し、日韓共同の海女文化登録運動においては、政治的文脈ではしばしば対立する韓国人と日本人が国境を越えて同一の海女文化を持つことを主張し、その事実をユネスコや各国政府が認定することを求めるものである。このことが意味するのは、韓国の済州島と日本の三重県沿岸部(伊勢・志摩・鳥羽地方)というローカルな場からユネスコ等のグローバルな場に対して文化と民族(国家)に関する新たな関係性を示し、従来の原則ないし前提を根本的に問い直すことを迫るものと言えよう。

海女文化登録運動はまた、ユネスコの文化遺産保護の理念や政策に伴ってグローバルに拡大、浸透した国家及びユネスコによる文化の一元的な評価制度とそれに基づいた文化政策にも見直しを迫る可能性を秘めている。ユネスコの文化遺産リストへの登録(記載)申請は、文化遺産保護条約を批准した国の政府機関を通して行うことになっている。そのため、意図するか否かは別として、結果的に、各国政府の担当部署や機関が登録申請案件を一元的に評価・格付けし、申請の優先順位を決めることになる。韓日共同の海女文化登録運動においても、従来の国ごとの「縦割り」の評価、申請手順に従って、韓国と日本の関係者がそれぞれの政府の担当部署や機関に早期の登録申請を働きかけている。しかしながら、海女文化登録運動においては、それと同時に、韓国の地方(済州島)と日本の地方(三重県の伊勢・志摩・鳥羽地方)の関係者がローカルレベルで国を越えた「横のつながり」(協力関係)を強め、それぞれの政府の担当部署や機関に働きかけを行っている。このことが意味するのは、韓国の済州島と日本の三重県沿岸部(伊勢・志摩・鳥羽地方)というローカルな場から各国政府のナショナルな場、さらにはユネスコ等のグローバルな場に対して、文化をめぐる評価や格付け、従ってまた文化政策などについて間接的な見直しを迫るものと言ってよいだろう¹⁰⁾。

以上、日韓共同による海女文化のユネスコ無形文化遺産登録運動の意義や意味を、グローバ

ル化とローカル化、グローカル化の3つの異なる観点から検討してみた。その結果、グローカル（化）の観点を導入した民俗学（筆者は「グローカル民俗学」として提示）は明らかに従来の民俗学とは異なっており、また、グローカル（化）の観pointsの導入が、グローバル化した今日の民族事象を記述、分析する上できわめて効果的であることも明らかになったであろう。

(3) 「グローカル民俗学」の意義

前節の「日韓共同の海女文化のユネスコ無形文化遺産登録運動の分析」で示したように、筆者の提唱する「グローカル民俗学」は、①ある特定の民俗事象をローカル（化）とグローバル（化）の両方の文脈から記述するとともに、②両者の相互作用の中で当該民俗事象を分析する点を最大の特長とする。冒頭で述べたように、筆者は、今日の民俗学が取り組むべきもっとも重要な課題の一つは地球規模（グローバル・レベル）の民俗事象の変動、すなわちグローバル化への対処であると考え。一方、民俗学がもっとも効果を発揮してきたのは特定の地方、地域（ローカル・レベル）や国（ナショナル・レベル）の民俗事象の研究であることは疑いない。筆者の提唱する「グローカル民俗学」はグローバル・レベルとローカル・レベル（ナショナル・レベルも含む）をグローカル・レベルとして接合し、両者ないしさまざまなレベルの民俗事象の複眼的な研究を可能とする意義を持つものである。

グローカル民俗学を実践することにより、今日の民俗学や人類学、あるいはさらに人文社会科学全体が直面しているより大きな課題、すなわち、当該研究の全体性や包括性の回復を理論的、方法論的に可能とする道を拓くであろう。

グローカル民俗学の試みは、民俗学をローカルな場・文脈における研究という呪縛から解放するという意味での「脱土着化」ではない。グローカル民俗では、確かにローカルな場・文脈で生起する民俗事象をグローバルな場・文脈から研究することを試みる。その意味では、「脱土着化」と言うこともできよう。しかしながら、グローカル民俗学はグローバルと同時にローカルな場・文脈での研究も試みるものである。その意味で、グローカル民俗学は民俗学を「脱土着化」した上で、さらに「再土着化」するものである。民俗学を脱土着化し、さらに再土着化するグローカル民俗学は、当該民俗事象をローカル、リージョナル、ナショナル、グローバルなどさまざまな場・文脈においてより「厚い」記述と、より「深い」分析を可能とするであろう。

4. 「グローバル民俗学」と「世界民俗学」

桑山（2000：3）は、柳田国男の構想していた「比較民俗学」をアジア等の特定地域の民俗事象を比較検討する民俗学、「世界民俗学」を特定の国の民俗事象の研究（一国民俗学）を基にして世界的な規模で比較総合した民俗学の試みであったととらえている。

これを受け、筆者はかつて、世界民俗学がローカル（国）とグローバル（世界）の両者を視野に入れているという意味で「グローバル研究」に他ならないと評価したことがある（上杉2012参照）。しかしながら、その後、柳田の生きていた時代、あるいはその当時の民俗学の問題意識と、筆者がグローバル研究を提唱する今日の社会的、文化状況、あるいは問題意識には大きな隔たりがあり、筆者の評価は必ずしも正しくはなかったと考えるに至った。

というのも、柳田の構想した「世界民俗学」は明確な境界と独自の社会、文化を持った国（国民国家）の存在を前提としており、柳田は特定の国の研究に基づいた「一国民俗学」をまず完成させ、一国民俗学を世界的な規模で比較することによって世界民俗学を完成させようとしていたからである。筆者は、柳田の構想した世界民俗学は、一国民俗学を特定の地域を越えて世界的規模で比較検討した、言わば拡大版の比較民俗学と見なすべきではないかと考えている。その意味で、柳田の構想した世界民俗学は、理論と方法論の両面において、ジェームズ・G・フレーザー（『金枝篇』*The Golden Bough* 1890 他）やエドワード・B・タイラー（『原始文化—神話・哲学・宗教・言語・芸術・慣習の発達の研究—』*Primitive Culture: Researches into the Development of Mythology, Philosophy, Religion, Art, and Custom*, 1871）らが進めた人類学ないし民俗学にきわめて近かったのではないと思われる。

明確な境界と独自の社会、文化を持った国（国民国家）の存在を前提とする世界民俗学の構想に対して、筆者の提唱する「グローバル民俗学」は必ずしもそれらを前提としておらず、むしろ社会や文化が急激に脱領域化し、流動化する今日的な状況に焦点を当てるものである。グローバル民俗学は特定の国の民俗事象であってもそこに地球規模に拡大、浸透した共通の要素を見るとともに、その事象が逆に、地球規模の事象にも影響を及ぼしている事実を見ようとするものである。言葉を換えて言うならば、グローバル民俗学は、一国民俗学の中に世界民俗学を見ると同時に、世界民俗学の中に一国民俗学を見る試みである。

従って、柳田国男の構想した「世界民俗学」は明らかに筆者の提唱する「グローバル民俗学」とは異なるものである。しかしながら、ローカルな場・文脈に根差した民俗事象の研究＝一国民俗学に基づきつつ世界的な規模（グローバル）の比較を行おうとしたという意味では、

世界民俗学にはグローバル民俗学と共通する姿勢を見出すことができる。今となっては、柳田の構想していた世界民俗学がはたしていかなるものになり得たのかは不明である。しかしながら、国際連盟の設立（1920年）に象徴されるような国家間の政治や経済、社会、文化等の相互依存が増大しつつあった日本民俗学の創設期に、人類学や民族学とは異なったものとして世界民俗学を実現したとすれば、それは当然、当時の民俗事象の国際性（普遍性、差異）と地域性（固有性、類似）の両者に目配りをした民俗学、すなわち本小論で提示した「グローバル民俗学」に近似したものになっていたと思われる。その意味で、筆者は、柳田國男が構想した「世界民俗学」を今日的に展開すれば「グローバル民俗学」になるのではないかと考える。

おわりに

本小論では日本内外の民俗学や人類学の研究動向を概観し、近年の社会的、文化的な研究環境の変化に伴って欧米の民俗学や人類学の再編、再構築が試みられていることを確認し、日本の民俗学が目指すべきは成果発表の「国際化」ではなく、研究対象の「グローバル化」への対応であることを指摘した。また、グローバル化時代の社会的、文化的事象ないし過程をより当事者目線で記述、分析するためには、グローバル化とローカル化が同時かつ相互に影響を及ぼしつつ進行する点を強調する「グローバル研究」の理論と方法の導入が効果的であることを述べた。その上で、いわゆる「グローバル化時代」の民俗事象をより効果的に研究する民俗学として、グローバル研究の理論と方法を導入した「グローバル民俗学」を提唱した。そして、グローバルな視点（世界大的視点）とローカルな視点（生活の場の視点）の両者の接合を試みるグローバル民俗学は、柳田國男が「一国民俗学」、「比較民俗学」の延長線上に構想した「世界民俗学」の今日的展開とみなし得るであろうことも述べた。

グローバル化とローカル化が同時かつ相互に影響を及ぼしつつ進行する点に着目するグローバル民俗学は、ローカル化したグローバルな民俗事象とともにグローバル化したローカルな民俗事象を、当事者が日々生活するローカルな場を起点にして記述、分析するという役割を担うことになるであろう。今後の民俗学は海外志向の「国際化」ないし「脱土着化」の方向のみを強調するのではなく、むしろグローバルな変化を念頭におきつつも、あくまでもローカルな民俗事象にこだわるという意味で「グローバル化」ないし「再土着化」すべきであろう。

注

- 1) 本小論は、2015年7月12日に関西学院大学大阪梅田キャンパスで開催された第881回日本民俗学会談話

会（第67回年会プレシンポジウム）、「世界のなかの民俗学」での発表、「『グローバル民俗学』の構想——柳田國男の「世界民俗学」の今日的展開として——」を元書き下ろしたものである。談話会当日は、参加者から貴重なご意見やご批判をいただいた。この場を借りて感謝申し上げる。なお、談話会発表の要旨は拙稿〔上杉2015〕参照。

- 2) “Folklore and Anthropology: A One-Day Symposium jointly hosted by the Folklore Society and the Royal Anthropological Institute” (<http://folklore-society.com/events/folklore-and-anthropology-1>) 及び “Fw: Call for papers-Anthropology and Folklore. A one-day seminar organized jointly by the RAI and the Folklore Society” (<https://networks.h-net.org/node/3128/discussions/70910/fw-call-papers-%E2%80%93anthropology-and-folklore-one-day-seminar>) 参照。
- 3) ただし、経済学や国際関係論等の分野ではグローバル化という言葉はしばしば国際化の場合と同様に海外を指向するものとして、地球規模の市場（グローバル・マーケット）や社会に日本がいかに参入し、競争に打ち勝つかが主要課題となっている。
- 4) アメリカの人類学においても同様の動きが見られ、「公共人類学」（public anthropology）と称されている（山下2014参照）。
- 5) それぞれ、*American Anthropologist*（アメリカ人類学会）、*American Ethnologist*（アメリカ民族学会）、*Journal of American Folklore*（アメリカ民俗学会）を刊行。
- 6) そしてまた、アメリカの民俗学が2000年代に入ってから継続的に理論的関心を持ち続けていることにも注意を喚起しておきたい（Lee (ed.) 2016参照）。
- 7) 日本民俗学会ホームページ「各種事業」「国際交流担当からのお知らせと催し物の記録」（http://www.fsnet.jp/project/27th_international/international_exchange.html）参照。
- 8) 韓国済州島で当初海女文化の生産に関わっていたのはアメリカ流の教育を受けた文化人類学者であったが、そのためもあって、海女文化の要素として女性の地位（ジェンダー）や平等（社会階層・格差）、健康（老人問題）等に注目したと思われる。
- 9) その後、登録運動が停滞した2010年頃には海女の伊勢神宮（皇室）の儀式への貢献（のしアワビの奉納）が強調され、ここに至って、韓国は日本とは別個に登録運動を展開することとなった。
- 10) その他、文化の概念そのものや文化の正当性、文化の意味等についても、グローバル化とローカル化、ローカル化の観点とでは異なった見方ができる。詳細については拙稿（2011b、2014）を参照。

参考文献

- 上杉富之、2009a、「グローバル研究の構想—社会的・文化的な対称性の回復に向けて—」、上杉富之・及川祥平（編）、『グローバル研究の可能性—社会的・文化的な対称性の回復に向けて—』（シンポジウム報告書）、成城大学民俗学研究所グローバル研究センター、14-26頁。
- 、2009b、「『グローバル研究』の構築に向けて—共振するグローバリゼーションとローカリゼーションの再対象化」、『日本常民文化紀要』第27輯：(43)-(75)頁。
- 、2011a、「序論—グローカリゼーションと越境」、『グローカリゼーションと越境』、成城大学民俗学研究所グローバル研究センター、3-19頁。
- 、2011b、「グローバル化としての「海女文化」の創造—韓国と日本におけるユネスコ無形文化遺産登録運動—」、『グローカリゼーションと越境』、成城大学民俗学研究所グローバル研究センター、85-113頁。
- 、2012、「一国民俗学、比較民俗学、そして世界民俗学へ—柳田國男の見果てぬ『夢』」、『現代思想』40巻12号：232-240頁。
- 、2014、「グローバル研究を超えて—グローバル研究の構想と今日的意義について—」、『グローバル研究』（成城大学グローバル研究センター）、1号：1-20。
- 、2015、「『グローバル民俗学』の構想—柳田國男の「世界民俗学」の今日的展開として—」、『日本民

- 俗学』284号：120-121頁。
- 川森博司、2015、「民俗学の脱土着化への試みと課題」『日本民俗学』284号：121-122頁。
- 桑山敬己、2000、「柳田国男の『世界民俗学』再考—文化人類学者の目で—」『日本民俗学』222号：1-32頁。
- 菅 豊、2008、「American Folklore（アメリカ民俗学）と日本民俗学（Japanese Folklore）の対照—民俗学は変わらねばならない—」（日本民俗学会第836回談話会発表要旨）
http://www.fsjnet.jp/regular_meeting/abstract/836.html、2015年6月28日閲覧）
- 、2014、『「新しい野の学問」の時代へ—知識生産と社会实践をつなぐために』岩波書店。
- 日本民俗学会ホームページ「各種事業」「国際交流担当からのお知らせと催し物の記録」http://www.fsjnet.jp/project/27th_international/international_exchange.html（2016年1月15日閲覧）。
- ヒルシュフェルダー、グンター、2008、「戦後のドイツ民俗学—研究の場、方法及び課題」、上杉富之・松田睦彦（編）『戦後民族学／民俗学の理論的展開—ドイツと日本を視野に—』（国際シンポジウム報告書）、成城大学大学院文学研究科・成城大学民俗学研究所、37-47頁。
- 森 明子（編）、2014、『ヨーロッパ人類学の視座—ソーシャルなるものを問い直す』世界思想社。
- 山下晋司、2014、『公共人類学』東京大学出版会。
- Fioramonti, Lorenzo, 2013, The World's Most Powerful Number: The Assessment of 80 Years of GDP Ideology, *Anthropology Today* 30-2: 12-20.
- "Folklore and Anthropology: A One-Day Symposium jointly hosted by The Folklore Society and The Royal Anthropological Institute," <http://folklore-society.com/events/folklore-and-anthropology-1>（2015年7月2日閲覧）
- "Fw: Call for papers-Anthropology and Folklore. A one-day seminar organized jointly by the RAI and the Folklore Society"
<https://networks.h-net.org/node/3128/discussions/70910/fw-call-papers-%E2%80%93anthropology-and-folklore-one-day-seminar>（2015年7月9日閲覧）。
- Parkin, David and Ulijaszek, Stanley (eds.), 2011, *Holistic Anthropology: Emergence and Convergence*, New York: Berghahn Books.
- Haring, Lee (ed.), 2016, *Grand Theory in Folkloristics*, Bloomington, Indiana: Indiana University Press.